

Title	自閉的なクライアントの心理療法における自他の分離に関する研究 - ボールのやり取りに着目して - (Abstract_要旨)
Author(s)	高橋, 悟
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2020-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.r13311
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2020-10-01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（教育学）	氏名	高橋 悟
論文題目	自閉的なクライアントの心理療法における自他の分離に関する研究 — ボールのやり取りに着目して —		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>自閉スペクトラム症に対しては、近年、いわゆる心理療法的アプローチは主流ではなくなっているが、その一方で、自閉スペクトラム症を「自他の分離」の躰きとして捉え、心理療法的アプローチを実践する立場もある。本論文では、これらの観点の中の「キャッチボールモデル」に着目し、第一章ではボールという遊具について、その歴史的な経緯も含めた検討を行っている。さらに、実際のボールのやり取りを検討して「キャッチボールモデル」を拡充し、それが、「自他の一体感」や「自他の予測を超えるもの」をもたらし得るという観点を得た。</p> <p>第二章では、経過の中で自閉症と診断された男児のプレイセラピーの事例が検討され、セラピストとの分離以前の一体感の中にいたクライアントが、セラピストとのディスコミュニケーションを体験し、最終的に自他の分離が生じたと考えられた。</p> <p>第三章では、経過の途中から盛んにセラピストとボールを蹴り合うようになった、全般的な発達の遅れが見られた男児のプレイセラピーの事例が検討され、ボールの蹴り合いが自他の分離を前提としており、かつまたボールの蹴り合いそれ自体が、両者の対峙的な関係を促進すると考えられた。</p> <p>第四章では、プレイセラピーにおけるボールのやり取りについて、自他の分離と一体感は同時的に生じ、また他者との一体感は、両者の間を動くボールへの専心を通してなされることが考えられた。またボールのやり取りには本質的にそのボールをやり取りする両者の予測を超えるものが含まれることが示され、それに対してセラピストが「能動的に身を投げ出す」とでも言うべき姿勢が重要であると考察された。</p> <p>第五章では、自閉症スペクトラム障害が疑われた青年の事例が検討され、自他の分離は、セラピストとの対峙の中で生じてきたものと考察された。第六章では、自閉スペクトラム症と診断され、緘黙とカタトニア様の身体のぎこちなさを呈した高校生の事例が取り上げられた。この事例でセラピストとクライアントのコミュニケーションが生じるプロセスにおいて、セラピストの言葉やクライアントの反応を、両者の間を行き交う「ボール」として捉える視点が示された。</p> <p>第七章では、心理療法面接における言葉等のやり取りについて、一体感を伴ってリズムカルに進んでいく言葉のやり取りは、クライアントの自他の分離をもたらす可能性を内包していることが考察された。さらに、第六章の事例のプロセスが再検討され、セラピストによって投げられる「言葉のボール」と、それに対するクライ</p>			

エントの反応は、両者の予測を超えるものとして行き交っていたと考えられた。

終章では、自閉的なクライアントの心理療法における自他の分離について、ボールのやり取りの観点から総合的に考察された。自閉的なクライアントの心理療法に、ボールのやり取りという観点を持ち込むことの意義が、ボールのやり取りにおける自他の分離と自他の一体感の同時性の観点から考察された。最後に、ボールのやり取りに必要な治療者の姿勢として、受け身のスタンスで「身を任せる」のではなく、「能動的に身を投げ出す」姿勢が重要であると結論された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、自閉スペクトラム症を「自他の分離」の躰きとして捉え、心理療法的アプローチを実践する立場に立ち、特に「キャッチボールモデル」に着目したうえで、その心理療法的アプローチの本質に迫ろうとした、意欲的な論文である。

まず第一章ではボールという遊具について、その歴史的な経緯も含めた検討を行っている。さらに、「キャッチボールモデル」を拡充し、それが「自他の一体感」や「自他の予測を超えるもの」をもたらし得るという観点を得た。ボール遊びを単なる遊びの一つとしてとらえるだけではなく、そのなかにある治療的機序に迫る論考として、興味深い。

第二章以降は、事例を基に、論が展開される。単なる理論的考察に留まらず、豊富な臨床経験に常に照らし合わせながら考察が深められているところが、本論文の魅力的なところである。第二章の事例では、自閉症と診断された男児のプレイセラピーが検討され、セラピストとの分離以前の一体感の中にいたクライアントが、セラピストとのディスコミュニケーションを体験し、最終的に自他の分離が生じたことが示された。第三章・第四章では、盛んにセラピストとボールを蹴り合うようになった男児のプレイセラピーの事例が検討され、ボールの蹴り合いが自他の分離を前提としており、また、ボールの蹴り合いそれ自体が、両者の対時的な関係を促進すると考えられた。そして、プレイセラピーにおけるボールのやり取りについて、自他の分離と一体感は同時的に生じ、また他者との一体感は、両者の間を動くボールへの専心を通してなされること、またボールのやり取りには本質的にそのボールをやり取りする両者の予測を超えるものが含まれることが示された。ボール遊びにおけるダイナミックなやり取りが、事例を基に説得力を以て、示された。

本論文で取り上げられる事例は子どもだけに限られていない。第五章では青年の事例が検討され、第六章では、自閉スペクトラム症と診断され、緘黙とカタトニア様の身体のぎこちなさを呈した高校生の事例が取り上げられた。これらの事例では、セラピストの言葉やクライアントの反応が、両者の間を行き交う「ボール」として捉えられており、「ボール」が拡張的な意味で取り上げられることによって、論文の広がりや深まりが生じた。

全体として、ボールのやり取りがもつ自他の分離と自他の一体感の同時性の観点を参照しつつ、これが自閉的なクライアントの心理療法に役立つことを示したことが、本論文の意義と言えるだろう。

ただ、事例検討においては、さらに深く検討することも可能であったのではないかと、そして、自閉的なクライアントに対する心理療法的アプローチに寄与するような独自性を、さらに明らかにすることも可能であったのではないかと、ということが、

試問において指摘された。しかし、こうした批判は本論文のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年 12 月 25 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降